

幽霊話に込められた禁忌の存在と知恵

1 本所の七不思議

暑い季節になると「怪談」が出てきます。もちろん、幽霊などは、「霊」であり、もともとは人間なので「夏しか活動しない」というものではありません。しかし、生きている人間は自己都合で考えるので、暑いときに「涼」を求めて話をするのです。ですから、夏になると怪談話が出てきますし、遊園地などには「お化け屋敷」が出てくるのです。

では、これらに関して昔はどうだったのでしょうか。

江戸時代には「江戸本所七不思議」というものがありました。江戸の本所を中心に、不思議なことがあり、それらが江戸の中で夏の風物詩のように話されていました。時代の流れとともに「七不思議」が「九種類」あるのですが、それだけ江戸の人々に好かれていて、「あれもある」「こんな話聞いたことある」といって広まっていったのではないのでしょうか。とりあえず、その「九種類の七不思議」をご紹介します。

・片葉の葦

留蔵という男がお駒という娘に想いを寄せたが、相手にされなかったため、両国駒止橋近くで斬り殺し、堀へ捨ててしまった。その後この付近で生える葦は、みな片側だけしか葉が生えない。

・落ち葉なき椎

本所御蔵橋北にある松浦家上屋敷には、非常に大きな椎の木があるが、落葉するのを誰も見たことがない。

・津軽家の太鼓

火事を知らせる際に町方では半鐘をたたき、大名屋敷では板木を打っていたが、南割下水近くにあった弘前藩津軽家上屋敷ではなぜか太鼓を打つことを許されていた。

・送り提灯

夜中に本所出村町あたりを歩いていると、前方に提灯の明かりが見え、近づくと消えてしまう。まるで道案内をしてくれるような提灯である。

・灯りなしの蕎麦屋

本所南割下水あたりに行灯（あんどん）のついていない無人の蕎麦屋があった。客が蕎麦を食べようと待っても主はいつまで待っても来ない。また気を利かせ行灯の灯りを付けて

もすぐに消えてしまう。結局客はあきらめて家に帰るが、その後必ず凶事がおこる。

- ・足洗い屋敷

本所の旗本屋敷で、夜更けになると血にそまった大きな男の足が天井を突き破って現れ、「足を洗え、足を洗え」と騒いだ。家来たちが足をきれいに洗ってやると、足は引っ込み天井は元どおりになるが、手を抜くと大足が暴れだす。

- ・送り拍子木

入江町の時の鐘近くで夜回りをしていると、どこからともなく拍子木のカチカチという音が聞こえてくる。

- ・置いてけ堀

本所のとある堀で釣った魚を持ち帰ろうとすると、「置いてけ、置いてけ」という怪しい声が聞こえる。

- ・馬鹿囃子

夜になると、どこからともなくお囃子がきこえてきて、遠くにきこえたと思ったらすぐ近くできこえたりするという。その調子に誘われるままついて行って、気が付くと野原の真ん中で寝込んでいたという。

2 「七不思議」といわれるものの「7」に込められた意味

本所七不思議のスタイルは、多くの人に愛され、現代でも「七不思議」スタイルのものは非常に多くある。例えば近年はやった「学校の怪談」等も、代替の場合「七不思議」である。理科室の標本が動き出すとか、音楽室のピアノがいきなり鳴るとか、階段の踊り場の大鏡から人が出てくるなどは、学校の怪談の定番ですね。

これ以外にも、不思議な事象を七つあげて「〇〇の七不思議」と呼び表すことがあります。不思議とは仏教用語の「摩訶不思議・不可思議」の略で、人間の思考世界を超えた深い心理や現象を意味しているんです。まさに「人知を超えた世界」というものが、この話の中にあるのですね。そして「七」という数字は、仏教では人の死後は7日目ごとに供養することになっていたり、民俗の世界でも七福神・七草・七人塚・七つ道具などの言葉があることから、聖数信仰に通じると考えられます。このように言われれば、例えば、人が亡くなった後の法要で「初七日」という習慣がありますが、仏教的には「七」ということがあり、亡くなって七日目に自分が亡くなったことを悟る法要を行います。そして「七」が「七回」くると、その人は成仏するといわれています。ですから四十九日の法要でお墓に遺骨を入れるのですね。

では、なぜ「七」が神秘的な数なのでしょう。

数字には「陰」の数と「陽」の数があるといえます。二つに割り切れる数字、要するに奇数が「陰」、割り切れない数字、要するに偶数が「陽」の数ということになります。「奇数」という漢字があてられていることでもわかるとおりに、仏教的には「余る」というこ

とが「奇妙なこと」というように認識されます。そのために、「余る」数は、そのまま「奇妙」な数であり、それは、仏法の加護を受けていない状態。まさに「陰」ということになるのです。

当然に「陰」の数の最も大きなものは「九」ということになりますね。そして「陽」の数の最も大きな数が「八」という数になります。ですから、「陽」の最も大きな数である「八」が、最も縁起の良い数として日本では認識されているのです。日本では漢数字の八の字が「末広がり」になっているという形式的な部分で、八を縁起の良い数と認識している人も少なくないのですが、八が縁起が良いのはそれだけではないのですね。

逆に、「八」という、最も縁起の良い数のすぐ手前にある陰の数「七」は、「大きな幸せの前の陰」という形になります。逆に、仏教の世界では「六道」というような、人生の迷いの道があるとされており、「七」はそれを超える入り口ということになります。

まさに「七」という数字は、「六道を超えたところ」という意味合いと同時に、「縁起の良い八の手前の陰の数」という悪い意味も併せ持ち、人知の範囲の境界の数字として認識されているのです。

このために、「七不思議」「七日忌」など、神秘性を持つ内容で「七」を持つ数字は非常に多く言われているのです。

このことは、何も理屈の上だけの話ではありません。七不思議と呼ばれるものは全国にみられますが、文献に記録されているもので約80種類になるとも言われていますし、このほかにも「七」にまつわる不思議なことはたくさんあります。それらの中で「摩訶不思議」が「九個」になってしまっても、いまだに「七不思議」といわれているのは、「七」という数字に日本人が特別な思い入れがあるからではないでしょうか。

かなり蛇足で、余談ですが、この「日本人の文化と精神の研究」でも、毎年七月になると幽霊の話をしているんですね。これは偶然、というよりは気温が暑くなってくるとこの話をしたくなるという基本的な日本人の性格によるところが大きいのです。

3 今昔物語からつながる怪談の教訓としての作用

「七不思議」がなぜ「七」なのか、日本人は「ラッキーセブン」というような概念ができるまでの間、「七」というのは、日本人にとって神秘の数字だったのです。ですから「七」とつくものは、江戸時代まで様々な部分で神秘性や、人間が理解できないということで使われます。

では、その理解できないことが七つ溜まるとどのようなことになるのでしょうか。

日本人は「わからないこと」「不安定なこと」に対して非常に恐れを抱きます。ですから、「謎解き」というのはひじょうに面白く、なおかつ、そのような行動を行う人の遊び心をくすぐるのです。しかし、その内容が「神秘の数」の不思議なことを知ると言うことになります。不可思議で不安定なことは、そのまま、知ることによって基本的には「不安定な

状況を脱する」ことができるようになります。いや、それが良いこととは限りません。大体の「七不思議」は、「七つ全部知ってしまうと死んでしまう」とか「七つ全部見てしまうと、不幸が訪れる」というような結末になっています。要するに、その内容が「不幸な結果」の報に落ちてしまうということになります。

しかし、一方で江戸のほとんどの人は「そんなことはない」ということを知っているのです。当然に、すべての秘密を知ってしまった人は死んでしまうのですから、その人の話などは聞けるはずがないのです。しかし、その人の話が様々な聞けるというのは、この物語や七不思議が、「神秘を楽しんでいる」という江戸庶民の感覚をよくわかったものではなかったのかと考えられます。

不可思議や怪異というのは、当然に平安時代から様々な存在します。今昔物語の巻27には、「本朝付霊鬼」と題されて、45話が収録されています。その中には、教訓を付したのも少なくないのです。例えば第8話「内裏の松原で鬼が女を食う話」などがあります。この話は「光孝天皇の御代、ある日の夕方、内裏の中で、女中が三人で歩いていたら、内裏の中の松原で見かけない顔の色男が手招きして呼んでいた。三人は近づいてみると、そのものが急に変化して鬼になりその中の一人を食べてしまった」という話です。この話の最後には、「女は人気のないさみしいところで、知らない男に呼ばれたからと言って考えもなくのこのことについて行ってはならぬ」という教訓で話を締めくくっているんです。このほかにも第17話「鬼に妻を食い殺される話」などは、「様子を知らない古い家に、宿をとるのは良くないということである」というように、このほかにもさまざまな教訓が書かれています。

このほかにも、「女性は嫉妬深いといけない」とか「知恵のある人には鬼であっても悪いことはできないものだ」など、普段の生活に根差した話が様々な存在します。

まさに、今昔物語にある怪談話は、そのままその話が説話になっており、その話が「教訓話」になっているのです。

当然にこの今昔物語にある「怪談を教訓とすること」ということは、怪談を楽しみながら、その中から教訓を学ぶということが会談の中の内容になっているのです。このことは江戸時代でも同じなのではないでしょうか。

4 本所という新興住宅地そして武家屋敷であるために流れた不思議

それでは、本所の七不思議はどのような「教訓」があるのでしょうか。

そもそも本所は、河川や掘割、旗本大名屋敷が多い場所です。明暦3年（1657）の江戸大火、先に挙げた「お七」の火事をきっかけとして、隅田川以東の地域の開発が始まりました。火事によって焼け出された人が多く、また、川を挟んで街を発展させた方が、途中で火を食い止めることができるということから、大火があっても町の半分が燃え残ることができ、町全体がなくなるという経済的な損失を防ぐことができるというような考えが、

根底にあったのではないのでしょうか。

明暦の大火から3年後の万治3年(1660)、徳山五兵衛重政と山崎四郎左衛門重政両名が本所築つきじ地奉行、要するに隅田川両岸の再開発奉行に仰せつけられるとともに本所に奉行所がおかれ、防火計画を伴う市街地拡張計画の一環として開発が進められていきます。現在でいえば災害の後の街づくり計画のようなことを、この二人が中心になって行ったというように考えてよいのではないのでしょうか。

街づくりの具体的計画としては、武家屋敷の区画整理や道路、河川や掘割の開発が行われ、縦川、大横川(横川)、横十間川(十間川)、六間堀などの整備が行われました。厠濠をめぐらせることによって、消火用水を確保するとともに、その川で大火の時に火をせき止める。川を渡れば火事の被害から逃れることができるというような街づくりを行ったんですね。

これと同時に、当然に水が多くを占めるようになれば、当然に下水に関しても整備しなければなりません。このつきじ地奉行は、その対策として主に排水を目的とした南北割下水などを作り上げるのでした。

このようにして整備された本所地域ですが、江戸の市中から見ると隅田川の川向こうに位置し、一步、横丁や裏道に入ると淋しい土地柄でもありました。ちょうど、現在でいえば、今まで発展していたところと違う場所に新興住宅地ができ、非常に計画的に、またキレに気を使って町ができたのですが、人通りも少なく、整然としすぎてしまって、少しさみしいような街になってしまったという感じに似ているのではないのでしょうか。

また、そのようにしてできた場所ですから、町の人々の間につながりも少なく、街そのものが新しい感じと、あまり人と人のつながりがない温かみの無い感じがあったということになりますね。

このように、人々の間で「人のつながりがない」「静か」「少し不気味」というと、やはり人間は何もなくとも怖くなってしまいます。そして、その恐怖心が、風の音だけでも、怖いと思ってしまう、それらが妖怪や怪異の仕業というようになってしまうのです。

しかし、本来であれば「新興住宅地」であるはずの本所のあたりに「怪異」の話などが出るとは、新興住宅地のイメージが下がってしまい、あまり良いことではなかったはずではないのでしょうか。

しかし、そのことが、実は「七不思議」そのものに隠されているのです。

例えば「落ち葉なき椎」では、その舞台は「本所御蔵橋北にある松浦家上屋敷」ですし、「津軽家の太鼓」では「弘前藩津軽家上屋敷」が物語の舞台になっています。「足洗い屋敷」でも、名前はわからないが「本所の旗本屋敷」が舞台です。このように、本所の七不思議のうち3つが「武家屋敷」ということも一つのことになっています。何しろ武家屋敷には、様々な秘密があり、その秘密は隠さなければならないことです。現在では、有名人はその身分を維持するために、悪いうわさやおどろおどろしい話は忌み嫌いますが、江戸時代の武士は、江戸の庶民の評判において、その地位が危ぶまれることはほとんどありません。

そのことから、治安の維持と、秘密の保持ということから考えれば、別に怪談話であれ、本所七不思議であっても、人が近づかない方が良いという判断もあったのかもしれませんが。本所の七不思議に、「松浦家」や「津軽家」のように名前が挙げられてしまっても、そのことはそんなに大きな問題ではなかったのではないかと考えられます。

5 武士が怪談話をする理由

武家は、そんなに「怪異」ということにあまり大きな問題を払わなかったのではないかと考えられます。

江戸時代の二大巨頭といわれる「番町皿屋敷」（関西では播州皿屋敷になっています）と、「四谷怪談」。これはいずれも武家の家柄の話です。この二つの怪談に関しては、別な機会にお話しすることがあると思います。

また、これ以外にもさまざまな怪談があり、肝試しのような形になっているものもあります。

そもそも、武家の武勇を誇るところで妖怪の退治話が使われるのは、「須佐之男命の八俣遠呂智退治」です。これは古事記や日本書紀に書かれた話です。

須佐之男命は、櫛名田比売との結婚を条件に、八俣遠呂智退治を請け負います。まず、須佐之男命は櫛名田比売を櫛に変えてしまい、自分の髪に挿した。そして、7回絞った強い酒を醸し、酒を満した酒桶を置くようにします。八俣遠呂智がやって来て、酒桶に突っ込んで酒を飲み酔って寝てしまうと、須佐之男命は十拳剣で切り刻んだのです。このとき、尾を切ると剣の刃が欠け、その後尾の中から出てきたのが「草薙の剣」で、須佐之男命は、この草薙の剣を、天照大御神に献上するという話です。

しかし、この話は、酔わせて倒したというような話ですから、純粋な武勇自慢ではありません。純粋な武勇自慢は「鵺退治」^{ぬえ}かもしれません。

『平家物語』や摂津国の地誌『摂津名所図会』などによると、近衛天皇の時代、御所・清涼殿に、毎晩のように黒煙と共に不気味な鳴き声が響き渡り、幼少の二条天皇がこれに恐怖していました。遂に天皇は病の身となってしまう、薬や祈祷をもってしても効果はなかったのです。そこで、側近たちはかつて源義家が弓を鳴らして怪事をやませた前例に倣って、弓の達人である源頼政に怪物退治を命じました。源頼政は、先祖の頼光から受け継いだ弓を片手に怪物退治に行きます。そうすると、清涼殿を不気味な黒煙が覆い始めたので、頼政が山鳥の尾で作った尖り矢を射ると、悲鳴と共に鵺が二条の北方あたりに落下し、すかさず家来が取り押さえてとどめを差したのです。その時宮廷の上空には、カッコウの鳴き声が二声三声聞こえ、静けさが戻ってきたという言い伝えがあります。これにより天皇の体調もたちまちにして回復し、頼政は天皇から褒美に獅子王という刀を賞賜したという後日談までついているんですね。

このことは、何も源頼政のような豪傑ばかりではありません。先に挙げた今昔物語でも、

巻27の第43話「産女の出る川を深夜にわたる話」では、川に毎夜のように出てくる産女の幽霊の正体を見ることで、肝試しをするというようなことをしており、それに成功したものを称賛するというような話が出ています。

まさに、武士と怪異は、武士の肝試しという意味で最も大きな力になります。本所七不思議も同じで、新興住宅地で一般人が怖がるなか、大名家や武家は、そのような話があるなかでも平気で暮らしていけることで、武士の強さを示すことができ、同時に、そのことによって余計な人を近づけないというような効果があったのです。

同じことは、様々な城に伝わる「開かずの間」等にも同じことが言え、その中には、様々な秘密が隠されていることが多く、そのために人を近づけないようにしている部分もあるのです。

そして、武士の自慢話と、庶民の「怖い話から得られる教訓」があいまって、そして講談や落語などの話芸につながり、そして、それらが広まることで、七不思議は人の口を伝わって、大きな話になってゆくのです。

みなさんも、このような形で、怪談話を語る人によってその目的が違って、それらを面白く伝えることによって様々な話になるということは、興味深いのではないのでしょうか。